政治にパンチ!!
衆議院議員 大島あつし
国会リポート

発行：大島あつし事務所
埼玉事務所 〒363-0021
桶川市泉2の11の32
FAX:048-789-2117

2002年9月特別号
（上尾市・桶川市・北本市
鴻巣市・吹上町・伊奈町）

民主党にとっての政権交代と代表選挙

政見を訴えながら地元を歩いていると、年配の方に「自民党には世話になった。これだけ豊かにしてくれたのは、自民党のお陰だ」と言われることがよくあります。日本経済を低迷させ、金権腐敗体質から抜け出せない自民党であってもなお、自民党に恩義を感じている方はいるのです。つまり、そういう方々は「今の自民党に多少問題はあるが、これまでよくやってきたから、まだ政権を取らせておいてもいいじゃないか」と考えていらっしゃるようです。

政権交代は商品選択とは違う

とすれば、政権交代とはどういうことでしょうか。マスコミや一般の人たちの認識では、あたかも消費者が商品を選択するように国民は政権を選択するということになっています。家電量販店にA社とB社のテレビが置いてあったとして、消費者がA社のテレビを気に入って買うのと同じように、国民は気に入った政党を政権に就けるというわけです。

果たしてそうでしょうか。表面的にはそう見えるかもしれませんが、冒頭で紹介した自民党に恩義を感じている年配の方のように、政権交代には、単なる商品選択ではない、もっと違った深層心理が働いているように思えるのです。

そこで、大島は、その深層心理を「出入り業者論」として理解しています。たとえば、代々続いたラーメン屋があるとします。その店には、甲という業者がずっと麺を納入してきました。あるときから、自分のところの麺は甲の麺よりも高品質で安価だと自信を持っている乙という業者が売り込みに来るようになりました。ところが、いつもラーメン屋の主人は「甲の麺は代々使っていて、今のところそれほど不都合はないから」と断るのです。

ラーメン屋の主人としては、「代々甲の麺を使っているし、店が苦しいときには代金の支払いも待ってくれたりした。他の業者から『安くて品質のいい麺を持っている』とアプローチされても、それだけで麺の業者を代えるというリスクは冒せない」という感覚でしょう。

政策が優れているだけでは政権に就けない

大島が、国民の政権交代に対する深層心理を「出入り業者論」として理解するのも、まさにその点からなのです。このラーメン屋の主人を国民、甲という業者を自民党、乙という業者を民主党に置き換えてみましょう。すると、自民党に多少問題があって、民主党の政策のほうが優れているとしても、それだけで、国民は民主党を政権政党に選ばないのです。特に今のようにイデオロギー的な違いがあまりない時代においては、冒頭の年配の方のように、自民党に恩義を感じている部分が残っている限り、国民は進んで自民党を政権の座から引きずり降ろすという判断はしないでしょう。

では、どういうときに政権交代が起こるのでしょうか。ラーメン屋の話に戻すと、いくら甲の麺を代々使っているからといって、麺の納入がいつも遅れるようになったり、あるいは麺に異物が混入していたりしたら、ラーメン屋の主人としても業者を代えるという選択をせざるを得ません。そういう重大なミスを放っておくと、今度は、自分の店の評判が落ちて、客が来なくなるからです。

それと同じように、自民党が本当に重大な失敗を犯したら、国民も政権交代という選択をするでしょう。今の自民党は、数々の失敗はして

きていますが、いまなお国民の許容範囲にあると言えるかもしれません。

しかし、自民党を中心とした今の政治システムはすでに行き詰まってきており、今年9月以降は自民党の経済無策の結果として私たちの生活がさらに大変になる可能性が残念ながらあります。そのような事態は政治の重大な失敗にほかなりません。したがって、政権交代のチャンスがやってくる可能性は高いのです。

民主党が割れると自民党を利するだけだ

一方、そうしたなか、民主党はどのような対応をしていけばいいのか。

まず政権交代については先述したような事情から、民主党がどう政権を取るのか、小泉首相をどう攻めるのか、といったことばかり気を取られるのではなく、政権交代のチャンスがやってきたときに政権を十分に担えるような党内体制を整えておくのが肝要だと思います。

民主党には多士済々の議員が衆参合わせて183人もいます。しかし、そういう人たちがお互いに疑心暗鬼になってしまい、党が分裂してしまったら元の木阿弥です。それは自民党を利するだけですし、絶対にやってはいけません。

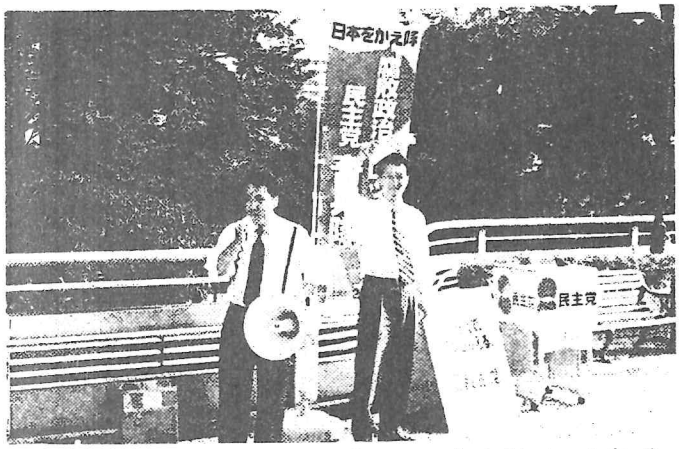
周知のように9月に民主党の代表選挙が行なわれます。それに向けて民主党内でも各代表候補および代表候補を担ぐそれぞれのグループの間で、民主党はどうあるべきかについてさまざまな議論が闘わされています。

相手の意見を聞く広い心と柔軟な姿勢を

そこで思い出すのが、大橋巨泉さんが民主党参議院議員だったときのことです。巨泉さんは民主党の衆参両院懇談会に出ると、冒頭の5分か10分だけ好きなことをしゃべって、いつもすぐに帰ってしまいました。

大島は、それはおかしいと思い、ある両院懇談会の場で、「自分が発言したら、それに対する他の議員の反応や反論にも耳を傾けてほしい。そうでないと議論自体も深まっていかない」と訴えました。このときには巨泉さんも最後までいたのですが、要は、自分の意見だけを言いっぱなしにするのではなく、相手の意見も十分に聞くという態度が民主政治には不可欠だということです。

同様に、今回の代表選の結果、選出された代表およびその代表を担いだグループは、党内で異論のある人たちの意見に十分に耳を傾けなければならないと思います。



「代表を勝ち取ったグループは党内で自分たちの意見や政策をどんどん押し出していくべきだ」と考えるのが一般的です。もちろん、それも必要でしょう。けれども、やはり党をリードする立場になったら、意見を異にする人たちの気持ちや政策を汲み取っていく度量も求められます。

そういう度量があることが、党の分裂を防ぐのですし、政権を担える体制をも形づくっていくことになると思うのです。意見を聞く対象は党内ばかりではなく、当然、日本国内のさまざまな利害関係者や外国の方々も含まれます。

重ねて言うと、民主党をリードするグループは他人の意見を徹底的に聞き、必要があれば、ねばり強く説得の営みを積み重ねていく。そういう広い心と柔軟な姿勢が、結局は政権を民主党に呼び寄せるのだと思います。その前提の下に大島も全力で取り組んでいます。

The Democratic Party of Japan 民主党 大島あつしのプロフィール

昭和31年生まれ45歳／早稲田大学法学部卒業／日本鋼管株式会社・ソニー関連企業に勤務／民主党衆議院小選挙区候補者公募に合格／衆議院厚生労働委員会委員